

「地域と子ども学」第2号発刊にあたって

白梅学園大学 子ども学部

教授 山路 憲夫

大学にとって地域貢献、地域連携という言葉はもはや自明の理ともいえる時代となったが、研究や教育と結び付けてどう具体化させていくのかは絶えざる実践的な課題である。

白梅学園大学は2005年度に開設された子ども学部だけの単科大学である。子ども学部は、09年度から子ども学部発達臨床学科、10年度から家族地域支援学科が新設されるに伴い白梅学園短期大学にあった心理学科、福祉援助学科は廃止され、白梅学園短期大学は11年度からは保育科だけの単科となる。こうした学部・学科の再編により、白梅学園は文字通り、子ども学の教育、研究の場、拠点として、さらに充実させていかねばならない課題を改めて背負うこととなった。

地域貢献、地域連携も白梅学園にとつてますます重要になってきた。

子ども学そのものが理論、方法、体系において緒に就いたばかりであること、子どもや子育て支援、地域との関わりの中で研究、教育を深めるといふ、すぐれて実

実践的な学問であるからである。

地域の子育て支援のニーズも多様化し、強まる。

ただならない少子化の中で、政府は10年度から子ども手当を新設し、待機児童の解消によりやく本腰を入れつつある。

こうした中で、大学が果たす役割は何か。

幸いというべきか、白梅学園は東京都東村山市から委託を受け、「子育て総合支援センター事業」（ころころの森）を2008年10月からオープンさせた。

「保育の白梅」として、長年培ってきた研究、教育の実践を生かしつつ、さらに子ども学、地域学研究を深める新たな足場を得たのである。

スタートしてから2年余りの実績を振り返ると、親子の利用者は一日平均100人を常に見え、2010年の年明けになってからは200人を超える日も珍しくない。親子が集い、憩える場としての広場利用が中心だが、白梅の教員たちによる母親講座や子育て相談、子育てサポーター研修などの幅広い事業も定着してきた。単に集える広場機能だけでなく、地域のニーズに沿ったこうした事業も含めた「総合子育て支援施設」としての役割を今後も強めていきたい。

大学、短大、及び大学院のゼミ、授業の一環として「ころころの森」を利用する頻度も高まり、卒論のテーマにも取り上げる学生たちも出てきた。教育、研究にとっても大きなプラスになる成果を生み出しつつある。

この成果をまとめ、全国に発信していくことも重要なのはいうまでもない。「地域と子ども学」を創刊した狙いの一端もここにある。ようやく2号を発刊することとなった。「ころころの森」の取り組みにとどまらず、子ども学の研究、教育の質を高めていくために、全国からさまざまなご意見やご批判をいただきたいと願う。